(8)大豆新品種候補「十育191号」について

道立十勝農業試験場　豆類第一科

1.はじめに

大豆の「トヨスズ」は、十勝地方を中心に広く普及し、実需者の評価も高い白目中～大粒の良質品種である。しかし、同品種が比較的晩熟であることから頻度の高い低温年の減収や黒根病[1)]による被害の発生などから、最近その作付けが減少している。本系統は、「トヨスズ」より早熟で多収な品種を開発するため、昭和46年に「十系463号」(育成中の系統)を母、「トヨスズ」を父として人工交配し、その雑種後代から、生産力検定試験[2)]、特性検定試験[3)]および奨励品種決定調査[4)]を実施し、選抜固定したものである。

2.特性の概要

本系統は、毛茸の色が白、短茎でしかも倒伏が少なく、「トヨスズ」に似た草姿となるが、同品種より4～8日早熟の中生種である。収量は、「トヨスズ」に比べ、育成地で2%、現地における試験で2～10%多収である。「トヨスズ」同様ダイズシストセンチュウに対する抵抗性が"強"であるほか、十勝地方で発生のみられる黒根病に対する抵抗性が同品種の"弱"に対し"強"であり、3箇年の検定試験中に発病株がみられていない。開花期項の低温に対する抵抗性は「トヨスズ」と同じ"中"であるが、同品種より早熟なので生育の遅延による冷害を軽減できる。また、転作大豆で被害のみられる茎疫病[5)]に対する抵抗性は、レースにより異なるが、道内で収集された3レースに対し"強"、1レースに対し"中"と判定される。子実は、臍の色が黄のいわゆる白目であり、粒大が「トヨスズ」と同様"大の小"に類別されるが、百粒重が同品種よりやや重く、外観上の晶質も同品種よりやや優る。加工適性は「トヨスズ」同様高く評価される。

3.普及態度

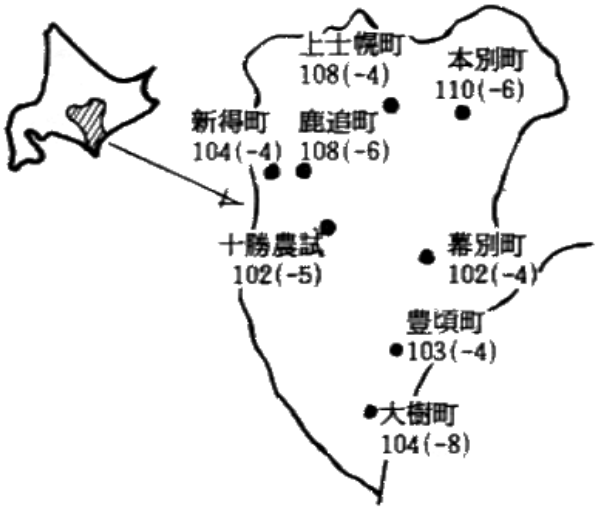
上記の特性から、本系統を十勝地方およびこれに類似の地帯において「トヨスズ」に替えて栽培し、道産の白目中～大粒大豆生産の安定と回復を図ろうとするものである。栽培にあたり、ダイズシストセンチュウに対し「トヨスズ」並の抵抗性を持っているが、連作あるいは短期の連作を避け、わい化病およびマメシンクイガの防除の徹底が必要である。

表１　大豆「十育191号」の特性概要

品種名＼項目	主茎長	早晩性	成熟期* 月日	収量* kg/a	同対比* %	抵抗性								百粒重* (g)	品質
						ダイスシストセンチュウ	黒根病	低温	茎疫病**						
									Pm1	Pm21	Pm25	Pm29	Pm55		
十育191号	短	中	10.2	27.5	102	強	強	中	中	強	強	強	弱	32.5	上下
トヨスズ	短	中の晩	10.7	26.9	100	強	弱	中	弱	強	強	(弱)	弱	31.5	中上
ヒメユタカ	中	中	10.6	28.0	104	弱	強	中	弱	弱	弱	弱	弱	34.6	中上
キタコマチ	短	中の早	9.28	26.2	97	弱	弱	中	弱	弱	弱	弱	弱	28.5	中上

注、*育成地における成績である。

**代表的な5レースについて検定した。Pm・55は山形県から収集された。



図、十勝地方における標準品種との子実重対比(%)と成熟期の差(括孤内、－は早いことを示す)。

表2、大豆黒根病に対する抵抗性検定試験成績*

品種名＼項目	昭和57年		昭和58年		昭和59年	
	病株率(%)	発病度	病株率(%)	発病度	病株率(%)	発病度
十育191号	0	0	0	0	0	0
トヨスズ	100	73	67	48	85	45
ヒメユタカ	0	0	0	0	0	0
キタコマチ	−	−	−	−	39	18

注、*十勝地方の本別町勇足の発病圃場で実施した。

---

1)土壌伝染病の被害であり、生育中～後期に立枯病の病徴を示す。

2)成熟期、収量、百粒重などを既存品種と比較し、選抜の参考とする試験である。育成地で昭和55年から5年実施。

3)病害虫や低温に対する抵抗性、品質などの検定を行い、選抜の参考とする試験である。昭和55年から実施。

4)試験機関で昭和55～58年に4箇所で実施し、委託農家では昭和56年から17～32箇所で実施。

5)土壌および水伝染性の病害であり、生育初～中期から立枯性の病徴を示す。病原性の異なる多くの病原系統、レースが知られている。

目次へ戻る